

2. 合同研修前期

期間：平成26年9月1日（月）～9月5日（金）

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

図表 2（合同研修前期 研修日程表）

9月1日（月）	
13:30～	開会の辞（内閣府青少年支援担当）
13:40～14:40	「平成25年度アウトリーチ（訪問支援）研修受講生 - 本研修から学び得られた事柄」
14:50～16:50	各研修生の活動紹介（自己紹介含む）
17:00～17:45	実地研修に伴う受入団体との情報交換
17:45～	事務連絡
9月2日（火）	
9:30～17:00 講義・演習①	「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク論」 久留米大学文学部社会福祉学科 教授 門田 光司 氏
17:10～17:30	講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク
9月3日（水）	
9:30～17:00 講義・演習②	「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ①」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史 氏
17:10～17:30	講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク
9月4日（木）	
9:30～17:00 講義・演習③	「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ②」 特定非営利活動法人 NPOスチューデント・サポート・フェイス 代表理事 谷口 仁史 氏
17:10～17:30	講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク
9月5日（金）	
9:30～11:00 講義・演習④	「アウトリーチの技法と当事者に求められる支援者像 ～約40年のひきこもり支援実績から」 特定非営利活動法人 青少年自立援助センター 常務理事 河野 久忠 氏
11:10～11:30	講義・演習から学び得られた事柄に関するワーク～実地研修で習得したい知識・技法等の整理～
11:35～	閉会の辞（内閣府青少年支援担当）

合同研修前期の初日は、研修受入団体（実地研修先担当者）との情報交換会と、平成25年度アウトリーチ研修受講生による講演、各研修生による自己紹介を兼ねた取り組み紹介を行った。

平成25年度に受講した研修生による発表では、練馬区学校教育支援センター川村達也氏から、実地研修先であった特定非営利活動法人スチューデント・サポート・フェイスでの研修内容、実地研修で習得した事項について発表した。

研修受入団体との情報交換会では、各研修生が担当者と初めて対面し、実地研修の内容や留意事項等について確認した。

また、各研修生の自己紹介・取り組み紹介では、氏名、所属機関・団体の取り組み、本研修に応募した理由等について紹介を行った。

9月1日（月）：平成25年度 - アウトリーチ（訪問支援）研修から学び得られた事柄
～現在の職場における取組も含めて～

練馬区学校教育支援センター スクールソーシャルワーカー 川村 達也 氏
- 概要 -

（1）一部資料（抜粋）

・アウトリーチ活動

- ・事前情報による分析、見立て(アセスメント)+訪問時の気づき
「配慮事項は何か？」(NGポイント、発達面、精神面)
「どういった入り方(訪問の仕方)があるか」
(初対面での自己紹介、家族の誰がキーパーソンか、)
「こちらの雰囲気はどのような感じがよいか」
(キャラクター、テンション、役割、モデル、年配の方の場合はこちらが教えてもらうという立ち位置をとる等)
「何を話題にできそうか」
(興味関心のあること、関係作りに関与するもの、目的意識)

最初の顔合わせ的な意味合い、訪問時の部屋の様子、本人の表情や服装、支援者への配慮、家族の関わり、問題意識の芽生え(改善解決への意欲)、次回につながる話題探しなど、**観察や注意を怠らない中での関係作り、意図をもった関わり。**

・学び

- ・徹底した危機(リスク)対応、リスク回避の意識
関係性を作っていくため、支援の失敗を防ぐため、何より支援者本人の安全を守るため。
- ・本人、その家族を尊重した関わり
それぞれに価値観や大事にしていることが違う。
押し付けや説教的な関わりではない支援者の存在。
- ・具体的であり、見通し(支援の入り口と出口)を持った支援
いつ頃までにどのようなねらいを持って、どんな関わりをしていくか。必要であれば、関係者にその意味やねらいが的確に説明できることが求められる。
支援のゴールは何か。完全に支援が終わるのではないとすれば、現状から少し距離を置いて見守ることができる条件は何か。

・学び

- ・組織の発展、戦略的人材育成、地域参画
年齢や経験に応じた支援者の育成、養成。事業運営・経営。安定した成果を出すための専門性の維持向上と対外的な信頼性の獲得。(成果をあげる活動)
県内、組織内でより良い支援を行うことのできる人材を育成していく「人を育てる」という観点。
若手にしかできない立ち位置、役割。(お兄さん、お姉さんとしてモデルとなりやすい斜めの関係)
30代になり、1スタッフとしてだけではなく、若手をけん引する立場、新人を指導する立場の育成。新人からの相談に対応できる能力。(ミドルクラス、相談責任者による組織運営)
新たな協力者、支援者、支援先の開拓、創造。(職親、就労体験、ボランティア受け入れ先の開拓、需要を見つけて活動にできるだけの地域社会を巻き込んでいく力)

・研修後-活動にいかしたこと-

練馬区内の課題：発達課題や不登校への対応

本研修と並行しながら、新たな支援策を検討。
登校支援担当(心理教育相談員)として区内の課題について分析、対応。
支援方法の提案、作成。

- ・区内の小中学校における教育相談分野の課題を分析
従来の支援方法では十分に対応できない領域がある。
既存の支援方法をより充実させる必要がある。
各支援者同士の専門性やつながりを強める必要がある。

お願い 取扱注意

- ・以下のスライド中に掲載されたデータは仮説です。
- ・各種調査による資料を読み取り、分析をした結果です。
- ・数値は必ずしも正確ではありません。傾向と捉えてください。
- ・外部資料としては精度にまだまだ課題があります。



講義風景①



講義風景②

9月1日(月)：実地研修に伴う受入団体との情報交換：受入団体一覧

- ・山武郡市広域行政組合 教育委員会 山武郡市教育相談センター（適応指導教室）
- ・調布市こころの健康支援センター
- ・特定非営利活動法人 わたげの会
- ・特定非営利活動法人 教育研究所
- ・特定非営利活動法人 北陸青少年自立援助センター
- ・特定非営利活動法人 ピアサポートネットしぶや
- ・特定非営利活動法人 青少年自立援助センター
- ・特定非営利活動法人 青少年援助センター北斗寮
- ・特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス
- ・特定非営利活動法人 奄美青少年支援センター



受入団体との情報交換①



受入団体との情報交換②

2日目から5日目にかけては、アウトリーチにおける専門性を有する講師から、講義と演習を実施した。

2日目は久留米大学文学社会福学科教授の門田光司氏から、「地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク」というテーマで講義及び演習を実施した。

3、4日目には特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス代表理事の谷口仁史氏から「アウトリーチと重層的な支援ネットワークを活用した多面的アプローチ」というテーマで講義及び演習を実施した。

5日目の午前中には、特定非営利活動法人青少年自立援助センター河野久忠氏から「アウトリーチの技法と当事者に求められる支援者像」というテーマで講義を実施した。

また、研修生は各講義・演習についてのレポートを作成した。

9月2日（火）：地域の関係機関・社会資源を活用した支援とソーシャルワーク

久留米大学 教授 門田 光司 氏

- 概要 -

※事例についてはプライバシー保護の徹底から割愛

(1) 「社会福祉実践」と「訪問支援（アウトリーチ）」～その起源～

米国への移民に伴った人口増加・都市化により、貧相層の拡大から開始されたキリスト教徒の「友愛訪問」が、ケースワークやソーシャルワークの起源となる。1900年代、「子供の貧困」、「児童労働」、「教育機会の保障」は社会問題であり、Visiting Teacher（訪問教師／アドボカシー）が今日のスクールソーシャルワークにつながる。

米国では、義務教育法に基づきアテンダントオフィシャー（登校における専門職）が、ケースを対応している。

こうした米国の社会福祉史を起源に、ケースワーク及びソーシャルワークの研究と実践がはじまった。

(2) 「アウトリーチ」と「ケースマネジメント」～ノーマライゼーション～

戦前、社会学における「同情」としての支援。

米国（ゴラード氏：知的障害に関する調査研究）で、刑務所施設入所する人の多く

が知的障害との研究報告。

米国史の知的障害者の大規模収容施設における非人道的な対応が、社会問題としてクローズアップされる。

ノーマライゼーションに伴う各国の脱施設化政策の動向をするため、障害者を地域に戻す政策に着手。

米国：人権的な視点をもとにした地域型支援

スウェーデン：施設ゼロを目指し、ケースの個別化を実施

イギリス：コスト面も考慮し、地域に復帰するコミュニティーを活用した支援

(3) 米国 D 氏（重度知覚障害、左上肢・両下肢不全）の事例

※割愛

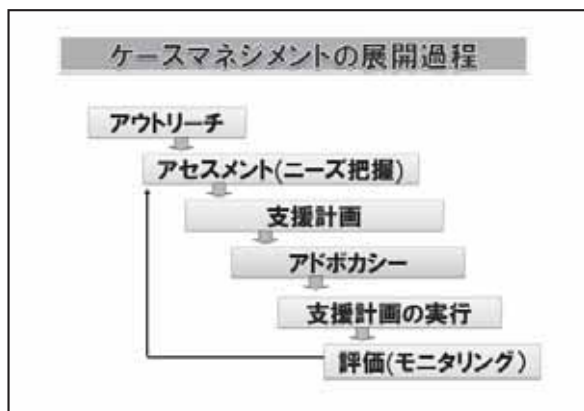
(4) ケースマネジメント～地域をつなぐ人材養成へ～

脱施設化後、地域支援サービスや、地域に戻すためのコーディネーターが未存であ

ったため、ホームレス増加等が生じる。そのため、地域生活支援のためのケースマネジメントの必要性が認識された。

- ・多様なニーズをもった人々
- ・自分の機能を最大限に発揮し、健康な生活を維持
- ・フォーマル及びインフォーマルの両面を支援すべく、ネットワークを組織し、調整する人材・チーム（維持・計画）

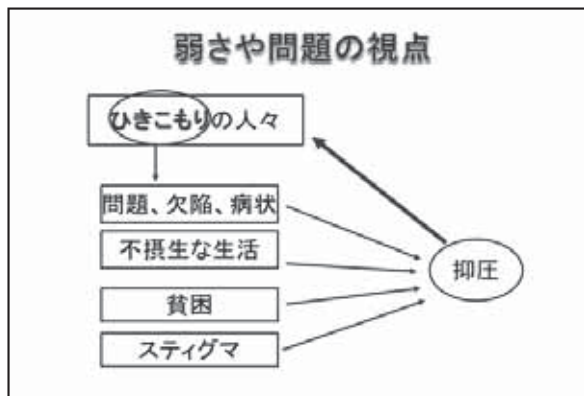
(5) ケースマネジメントの展開過程



※米国では、アドボカシーは必須のものとして位置づけられている

(6) ストレッサー (weakness : 弱さ) と問題 (problem) の視点

当事者によってストレスに対する耐性が異なり、また、当事者及び当事者家庭と周囲とでは必ずしも問題認識が一致するとはいえない。



(7) ストレngths (strengths: 強さ)

本人の「できること」に視点をおいた、ケースマネジメントが理想とされる。

ストレッサーについては、以降の実践例でも触れる。

(8) ソーシャルワーク (social work) とは
地域の関係機関とつなぎ、調整しつつ、チームとして支援する。



(9) ストレngthsの視点による実践例

※事例割愛

参考文献：奥村賢一「ストレngthsの視点を基盤にしたケースマネジメントの有効性に関する一考察（2009 社会福祉学 vo150）」

(10) 高機能自閉症者におけるひきこもり状態に対する支援事例と支援計画

※事例割愛

短期支援計画と長期支援計画の作成では、「誰が (人・機関)」「いつ (いつまで)」「どのような支援」を具体的に計画し、地域の関係機関がチームとなり、役割を明確した上で実施することが求められる。

